

なぜあわいの世界では時間が逆行するのか

——東日本大震災における遺族のみる夢を事例として——

東北学院大学 金菱 清

1 目的

この報告の目的は、東日本大震災における遺族のみる夢を事例に、なぜあわいの世界では時間が逆行するのかを明らかにする。このことを考えることで、社会的事象を圧倒的に規定する条件（社会の成立）を変更する力についての経験的データを私たちは目撃することができる。

この知見は、あらゆる社会学のデータが示すような「順行する時間」軸の措定に対して、原因と結果からなる因果関係を「逆転」させる力となる。例えば、コップを落とし、その結果コップが割れる。前者が原因で後者が結果である。この時系列の関係は日常生活で絶対に逆転しない。その意味で震災における「逆転」を考えると、津波が襲来し、その結果、愛すべき人が亡くなる。結果は事象の終着点となる。だが遺族の夢には、タイムマシンのように過去・現在を自在に移動する瞬間がある。

2 方法

2017年に出版した『悲愛』における遺族による手紙集の中には、なぜか（夜見る）夢の話が多く書かれてあった。手紙はその人の内実や世界観を映し出す鏡であった。そのなかで夢が多く出てくるのはなぜかという疑問を持った。学生と供に100人以上の被災者に話を伺いながら震災における亡き家族との夢での邂逅を集めた。すると、遺族の見る夢は明晰夢であることが少なくなかった。例えば次の事例がある。

亀井繁さんと宏美さんは、指切りをしている。「何もしてあげられないよ」「でも、信頼してる」「急がないから」「待ってる」一言一言、確かめるように宏美さんは話した。

「指切りをした手の感触は、起きてから鮮明に覚えていました。夢を思い出しながら『あの世から簡単に助けることはできない。でも、信頼しているからね。あの世に来るのを待っているけど、急がないからね。そっちの世界で修行しておいで』と妻から言われているような気がしました」（「最愛の妻と娘は魂の姿に」『私の夢まで、会いに来てくれた』より）

亀井氏の夢日記には、「おばけだぞ～」とおどけた口調で亡くなった奥さんが、かぶっと夫の鼻を噛んだとある。この噛んだという事象は、“触覚”を伴った実感である。

3 結果

分析の結果、これら「未来を記憶する」力と「過去を現在進行形に変える」力は、忘却しようとする社会に対して抵抗することがわかった。つまり、亡き人が現在を侵犯する形で関与し続ける。

4 結論

夢という他者が確認できないコミュニケーションの数々は、震災によって切り離されてしまった絆を確かな形を持って繋ぎとめられている。夢は過去に起こった事実を自由に「上書き」し、保存することで、二重の死を打ち消す力を生み出している。それは復興に対する明確なアンチテーゼとなる。

文献

- 金菱清編、2018、『私の夢まで、会いに来てくれた—3.11 亡き人とのそれから』朝日新聞出版。
金菱清編、2017、『悲愛—あの日のあなたへ手紙をつづる』新曜社。